

Pelvic tilt and movement during total hip arthroplasty in the lateral decubitus position

金沢, 正幸

<https://hdl.handle.net/2324/1806916>

出版情報 : 九州大学, 2016, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)

(別紙様式2)

氏名	金沢 正幸
論文名	Pelvic tilt and movement during total hip arthroplasty in the lateral decubitus position
論文調査委員	主査 九州大学 教授 本田 浩 副査 九州大学 教授 三浦 岳 副査 九州大学 教授 小田 義直

論文審査の結果の要旨

目的：人工股関節全置換術(THA)は側臥位で行われることが多い。この体位によって生じる3次元的な骨盤回旋は、カップの設置位置不良を来す1つの因子である。本研究では側臥位での骨盤回旋及び、術中に生じる骨盤回旋の変化を3次元的に定量化することを目的としている。

方法：初回 THA95 例を対象とした。術直前及び、術中カップ設置後の側臥位骨盤正面X線像をCTデータから再構築した画像に重ね合わせることで骨盤回旋を定量化した。手術時には、両上前腸骨棘と仙骨後方を圧迫する骨盤固定器を用いて骨盤を固定している。

結果：骨盤は側臥位において様々な回旋を生じていた。各平面での回旋は矢状面： -3.1° ($-25.5^{\circ} \sim 10.2^{\circ}$)、横断面： 3.9° ($-8.4^{\circ} \sim 17^{\circ}$)、冠状面： 0.9° ($-11.9^{\circ} \sim 13.2^{\circ}$)であった。臨床的に有意と考えられる 5° 以上の回旋変化は、矢状面で43%、横断面で47%、冠状面で12%の症例に生じていた。仰臥位での矢状面骨盤後傾が大きいほど、側臥位でも骨盤はさらに後傾した。術中生じる骨盤回旋変化は各平面とも約 3° 回旋しており、その範囲は -11° から 20° と広範囲であった。

結論：本研究ではTHAに伴う骨盤回旋を3次元的に明らかにした。骨盤回旋によって生じる変化はカップの設置角度に影響するため、正確に把握すべきである。今後は、さらに優れた骨盤固定法が望まれる。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め各調査委員により専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格とした。